

西南学院史 史料研究(1)

「学院史編集室史」

塩野 和夫 委員

はじめに

西南学院史の主要な史料は35のボックスに保存されている。その中の第1ボックスに付けられている名称は、「学院史・年表・申請許可・沿革一覧」である。さらに、この第1ボックスの冒頭に置かれているファイルが「学院史編集室史」である。つまり、35のボックスに保存された実に多くの西南学院史関連史料の中で、その冒頭に置かれているのが「学院史編集室史」なのである。この事実には、『西南学院七十年史 上巻・下巻』を作成した関係者の「学院史編集室史」に保存された史料に対する強い思いが表されていると見られる。

それはともかくとして、今後「西南学院百年史」の編纂作業に取り掛かっていくことになれば、このファイルに取められた史料から学ぶべき事柄は多いと考えられる。西南学院史の史料研究を「学院史編集室史」から始める理由はここにある。

「学院史編集室史」に取められた史料を年代で見ると、1950年代半ばから1990年代半ばである。要するに、西南学院の「創立五十年史」作成に取り組んだ記録、「創立六十年史」作成に取り組んだ記録、「創立七十年史」作成に取り組んだ記録、そして「創立七十年史」以降の学院史編集関連の記録が保存されている。

これら史料の全体像を明らかにすることから始めたい。

1. 「学院史編集室史」に保存されている史料

(1) 史料の一覧表

史料の概観を得るために、「学院史編集室史」に保存されている史料の一覧表を作成する。一覧表は古い史料から並べ、まず史料の順序を示す「番号」、資料の作成年月日を示す「年月日」、史料につけられた「表題」、史料のサイズや枚数を示す「体裁」、さらに史料の執筆者などを書き込む「その他」の項目を設ける。

なお、年代順に史料を並べたので、日付の記録がない史料は一覧表の末尾におく。

表1 「学院史編集室史」の史料一覧表

番号	年月日	表 題	体 裁	その他
1	1956. 3. 16	西南学院史編集に関する懇談会ご案内	B5判1枚	編集委員会
2	1961. 2. 28	西南学院歴史編纂準備委員会通知	B5判1枚	村上委員長
3	1961. 3. 4	西南学院歴史編纂準備委員会報告	B5判2頁	村上委員長
4	1962. 9. 29	「西南学院五十年史」出版計画	B4判1枚	
5	1970. 1. 26	新制大学への昇格をめぐる座談会	B5判1枚	
6	1970. 1. 27	「西南学院大学設立をめぐる座談会」開催について	B5判1枚	
7	1970. 3. 5	部内報「窓」第5号掲載の座談会開催について	B5判2頁	
8	1970. 10. 17	校史編纂をめぐる広報室の改組について	B5判2枚	
9	1970.	西南学院の今日までの歩み	B5判9頁	職員修養会
10	1971. 1. 29	再び校史編纂について	B5判2枚	田口欽二
11	1971. 3. 1	3度校史編纂について	B5判1枚	田口欽二
12	1971. 4. 19	学院史編纂委員会開催通知	B5判1枚	伊藤俊男
13	1971. 6. 23	学院史編纂組織の改組について	B5判1枚	伊藤俊男
14	1972. 1. 14	学院史の原稿資料執筆についてのご願い	B5判11枚	
15	1972. 12. 14	西南学院史監修者懇談会	B5判3頁	古賀院長 代理(議長)
16	1973. 2. 26	学院史編纂委員会のお知らせ	B5判1枚	編纂委員長 村上寅次
17	1973. 3. 26	4度学院史編纂について	B5判3枚	広報室長 田口欽二
18	1973. 4. 20	学院史編集室予算について	B5判1枚	田口欽二
19	1973. 4. 17	学院史編纂委員会(第3回)のお知らせ	B5判1枚	委員長 村上寅次
20	1973. 4. 25	学院史編纂委員会 第3回委員会	B5判2枚	
21	1973. 4. 25	学院史編集の基本方針について	B5判2枚	田口欽二
22	1973. 9. 6	学院史編集室報告(第1回)	B5判5枚	室長 田口欽二
23	1973. 11. 2	学院史編集委員会(第4回)のおしらせ	B5判1枚	委員長 村上寅次
24	1973. 11. 12	学院史資料収集と執筆について(第2回)	B5判4枚	田口欽二
25	1973. 12. 24	理事会記録(戦前のもの)読後報告	B5判3枚	田口欽二
26	1973.	西南史編纂について思うこと	B5判1枚	三串一士
27	1974. 4. 26	西南学院史編纂関係	B5判1枚	常任理事会
28	1974. 8. 27	児童教育科35年史出版スケジュールについて	B5判2枚	編集室長 田口欽二
29	1974. 11. 11	本学創設の歴史的意義	B4判1枚	大学広報 編集室長 田口欽二

表1 つづき

番号	年月日	表 題	体 裁	その他
30	1975. 1. 27	校史出版スケジュールについて	B5判2枚	編集室長 田口欽二
31	1975. 8. 11	西南学院史編集について	B5判2頁	本部署務次長 新谷信之
32	1975. 9. 6	西南学院史監修（刊行）委員会記録	B5判10枚	
33	1975. 9. 13	西南学院史監修委員会記録	B5判7枚	
34	1975. 12. 18	監修委員による学院史原稿読後メモ （第6巻～11）	B4版7枚	坂本
35	1976. 1. 21	学院史について	B5判1枚	学院史編集室長 田口欽二
36	1976. 2. 2	西南学院60周年記念パンフレット編集委員会開催 について	B5判1枚	中村弘
37	1976. 2. 5	福本原稿修正文 第1巻～第5巻	B5判21枚	
38	1976. 2. 26	学院史の刊行について	B5判3枚	学院史編集室長 田口欽二
39	1976. 3. 29	西南学院創立60周年記念写真展実施にともなう予 算申請	B5判1枚	学院史編集室長 田口欽二
40	1977. 2. 5	学院史の事実確認についてのお願ひ	B5判1枚 B4版5枚	田口欽二
41	1977. 3. 3	アドナイラム・ジャドソンについて	B5判4枚	編集室長 田口欽二
42	1977. 4. 21	見積書（波多野先生遺文集）	B5判7枚	福岡印刷
43	1977. 8. 6	資料室開設にあたってのお願ひ	B5判3枚	学院史編集室長 田口欽二
44	1977. 8. 18	御見積書（西南大学自然科学館1階家具工事）	B5判2枚	辻組
45	1978. 4. 18	勝山餘籟出版さる（大学広報44号）		切り抜き
46	1978. 7. 31	歴代院長の慰霊祭について	B5判1枚	学院史編集室長 田口欽二
47	1978. 8. 23	『学院史』現状報告	B5判2枚	学院史編集室長 田口欽二
48	1978. 10. 16	見積書（C.K. ドージャー生誕百年記念誌）	B5判6枚 B4版1枚	福岡印刷
49	1978. 11. 10	学院史関係保存資料	B5判1枚	学院史編集室長 田口欽二
50	1978. 11. 21	学院史資料室の現状他	B5判4枚	
51	1978. 12. 5	理事会議事録について（回答）	B5判1枚	E.L. コーブランド
52	1978. 12.	“西南学院史”出版に向かって（『窓』22号）	B5判2頁	川上弥生

表1 つづき

番号	年月日	表 題	体 裁	その他
53	1979. 2. 1	西南学院の歴史を知ろう (大学広報47号)		切り抜き
54	1979. 9. 13	「グーテンベルク聖書」展示ケース (案)	B5版1枚	
55	1979. 9. 13	学院史資料室規程	A5判5頁	関西学院
56	1979. 10. 9	西南学院大学トラー用展示ケース	A2版2枚	コトブキ
57	1980. 1. 30	グーテンベルク聖書の複製本を展示 (大学広報)		切り抜き
58	1980. 4. 28	西南学院創立64周年記念式典について	B4版1枚	院長 村上寅次
59	1981. 3.	学院史の出版とその意義 (『窓』27号)	B5判2頁	学院史編集室長 田口欽二
60	1981. 10. 13	学院史企画委員会経過報告	B5判4枚	
61	1986. 4. 11	編集後記 (『西南学院七十年史 下巻』)	A5判11頁	学院史企画委員長 村上寅次
62	1986. 4. 11	学院史の完成 (『西南学院七十年史』)	A5判13頁	
63	1986. 8. 9	納品書 (西南学院七十年史)	B5判6枚	ぎょうせい 九州支社
64	1986. 9. 4	西南学院史資料室規程 (案)	B5判3枚	
65	1986. 9. 5	学院史の委託頒布について	B5判2枚	理事長 坂本重武
66	1987. 2. 9	学園の生き字引退職 (西日本新聞)		切り抜き
67	1995. 8. 1	当面の学院史関係業務について	B5判1枚	広報・調査課
68	1995. 9. 5	学院史業務に関する話し合いについて	A4版2枚	
69	1995. 9.	『C.K. ドージャー小伝』(仮称)の刊行について	A4判2枚	広報・調査課 高松千博
70	1995. 10. 26	『C.K. ドージャー小伝』(仮称)の刊行および配布について (案)	A4版2枚	広報・調査課
71	日付なし	『グーテンベルク聖書』展示ケース (案)	B5判1枚	
72	日付なし	学院史編纂に関する文書	B5判1枚	1970年～ 1979年
73	日付なし	パネル展示室他	B4版2枚	
74	日付なし	学院史企画委員会	B4版14枚	1980年～ 1985年
75	日付なし	(1) 現在までに開催した座談会他	B4版1枚	1970年
76	日付なし	学院史関係座談会予定表	B4版1枚	
77	日付なし	西南学院の歩み	B4版2枚	大学祭実行委員会
78	日付なし	西南学院関係資料予算 (案)	B5判1枚	

表1 つづき

番号	年月日	表 題	体 裁	その他
79	日付なし	学院史編纂委員会組織図	B5判1枚	
80	日付なし	西南学院史編集基準	B5判1枚	
81	日付なし	学院史（1－7冊）についての意見	B5判4枚	坂本
82	日付なし	西南学院55年史目次	B5判25頁	
83	日付なし	「西南学院55年史」資料・原稿・貸出・借用表	ファイル	1871年～72年 西南学院広報室 田代二三生用

(2) 資料の分類

「学院史編集室史」に保存された史料の一覧表を作成することによって、このファイルには83点の史料が収められていることが分かった。これらについて分析するにあたって、まず分類しておきたい。どのように分類することがこれらの史料に対して適切であろうか。

学院史の編集という性格を考えると、創立以来の節目になる年が重要を持つ。また、一連の史料に節目となる年、つまり50周年（1966年）、60周年（1976年）、70周年（1986年）の時があり、その年に向けた学院史編纂作業に関連する資料が多く含まれていた。このような史料自体が持つ特色にしたがって、第1期から第4期まで、下記の通り分類する。

なお、日付の記入がない史料については内容から判断して、妥当だと判断される時期に入れた。時期的な確実性が確保できない場合には、史料の前に△を入れた。

第1期史料（1956年～1966年3月）

「西南学院五十年史」編纂作業関連史料
1～4、77、△78～80

第2期史料（1967年～1976年3月）

「西南学院六十年史」編纂作業関連史料
5～39、75、76、81、82、83

第3期史料（1977年～1986年9月）

「西南学院七十年史」編纂作業及び出版関連史料
40～63、71～74

第4期史料（1987年～1995年）

「西南学院七十年史」出版以降の編纂作業関連史料

64～70

2. 第1期 「西南学院五十年史」編纂作業をめぐる

(1) 史料の分類

第1期に属する史料は、日付が記されているものが5点、この時期の史料の可能性のあるものが3点である。

史料の内容から分類すると、次の通りである。

①学院史編纂委員会の関連史料 1・2・3・△79・△80

②五十年史出版計画の関連史料 4

③西南学院略史 77

④資料室関連予算 △78

(2) 組織と活動

「史料1 西南学院歴史編纂準備委員会通知」は、西南学院が創立40周年を迎えた1956年¹に「西南学院五十年史」編纂と出版に向けて呼びかけた懇談会の案内である。

「史料79 学院史編纂委員会組織図」は創立40周年の時点で発足した学院史編纂委員会の組織図かもしれない。また「史料80 西南学院史 編集基準」はこの時点の「編集基準」なのかもしれない。1961年4月に学院史編纂委員会は発展的に改組される。

「西南学院五十年史」の編纂と刊行事業に本格的に取り組むためである。

「史料3 西南学院歴史編纂準備委員会報告」は新しい組織の全体像を記している。それによると「西南学院五十年史」委員会は、「編纂企画」、「史料収集」、「史料整理」の3委員会からなり、学院全体から広く委員を集め配置している。以下の通りである。

1 西南学院は1956年に創立四十周年の記念行事を行い、学院史編纂への関心を示している。遡ると、創立二十周年（1936年）、創立30周年（1946年）の際にも、西南学院史編纂への自覚があったことを史料は記している。

「第3節 創立二〇周年記念行事及び募金運動」

（『西南学院七十年史 上巻』399-409頁）

「創立三〇周年記念行事」（『西南学院七十年史 下巻』19-21頁）

「第4節 学院史の完成」（『西南学院七十年史 下巻』174-186頁）

村上寅次「編集後記」（『西南学院七十年史 下巻』巻末）

「西南学院五十年史」編纂企画委員

(委員長) 村上寅次、河野貞幹、伊藤俊男、
河野博範、古賀武夫、大村たゞし、E.B.ドージャー、W.M.
ギャロット、中村保三、本村毅、
井上忠。

(顧問) 広羽元春

(西日本新聞史編纂者、同窓生)
小野有耶介
(福岡市史編纂者、同窓生)

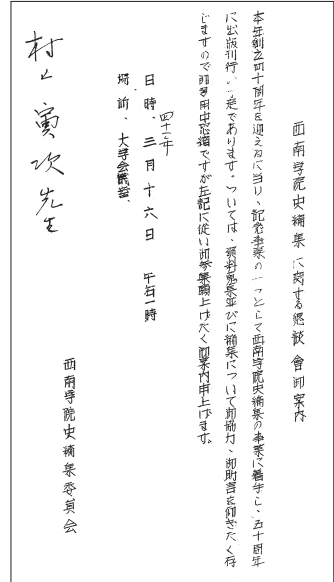
「西南学院五十年史」史料収集委員

(委員長) 大村たゞし、(本部関係) 中村
保三、遠山収、(旧中学部関係)
吉原勝、(新制高校関係) 中村
俊夫、(新制中学関係) 小石原
勝、(新制大学関係) 本村毅、(短
大・夜間課程) 篠崎直文、(短
大児教育科) 尾崎恵子、奥野和子、(旧高等部及び専門学校・英文科)
坂本重武、(同・商科) 大村たゞし、(同・神学科) 尾崎主一

「西南学院五〇年史」史料整理委員

(委員長) 木村図書館長、(委員) 伊藤治生、川上弥生、ほか1名本部より

本格的な組織が整えられたことによって、「西南学院五十年史」の編纂計画も立てられた。それによると、1963年に分担執筆を始め、1966年9月の刊行が予定される²。しかし、編纂作業は計画したようには進まなかった。編纂活動については、委員会が3回(1961年1月31日、3月4日、1962年9月29日)開かれたこと、創立45周年にパンフレット出版の計画を立てたこと、活動のため予算案を組んだことなどが分かる³。しかし、それ以上はよく分からない。創立45周年のパンフレット出版についても記録が残っていない⁴。



「史料1 西南学院史編集に関する懇談会ご案内」(1956年3月16日)

2 『西南学院七十年史 下巻』176頁。

(3) 編集の方針

「史料4 『西南学院五〇年史』出版計画」は、「I 編集方針 II 組織 III 予算」から、構成されている。さらに「II」は、「A 基本的性質」と「B 編集の重点」に分かれ、簡潔な「A」に対して⁵⁾、「B」は詳細である。「B」は「西南学院五十年史」の編纂に向けた具体的な方針と見ることができる。また、「B」の内容から、想定されていた「西南学院五十年史」を推察することができる。概要は以下の通りである。

- (1) 西南学院発展の年代史的把握。
- (2) 西南学院教育理念を明らかにする要因。
 - a 西部バプテスト教会と宣教師の活動。
 - b 日本バプテスト連盟との関係。
 - c 院長、その他指導的役割を果たした人々。
 - d 職員。
 - e 卒業生。
 - f 学校の雰囲気。
- (3) 学院の組織の発展の記録。
- (4) 学院の教育活動の発展（特に地方文化との関連において）。

教師の教育活動（特色ある教師、社会活動など）、学生・生徒の教育活動（文化部・運動部の活動）
- (5) 将来の展望。

3 「史料3 西南学院歴史編纂準備委員会」

『西南学院七十年史 下巻』175頁

「史料78 西南学院関係資料予算（案）」は、「学院関係資料室（現在三階高中教官閲覧室）整備費 60,000」を含む171,000円の予算案を記している。これがいつのことであり、どのような計画であったのか分からない。

4 西南学院創立五十年にあたり、「創立五十年史」は出版できなかったが、記念行事は多彩に行われた。

「第4節 創立五〇周年を迎えて」（『西南学院七十年史 下巻』67-79頁）

5 「A 基本的性質」には2項目があり、以下の通り、記されている。それらは、文字通り、「西南学院五十年史」の内容に対する基本的な方針である。

(1) 明治以降のわが国におけるキリスト教学校の発展という広い歴史的展望の中で西南学院の創立とその発展を位置づける。

(2) 西日本におけるキリスト教々育事業の発展、とくに北九州、福岡市を中心とする文化史との関連を考慮する。

(4) 成果と課題

『西南学院五十年史』を1966年に出版することはできなかつた。すでに1956年の創立四十周年記念の際に期待されていたにも関わらず、西南学院をあげての編集委員会を組織し、具体的な執筆の方針を示していたにも拘わらず、出版できなかつた。その原因はどこにあったのか。

「史料4」の「II 組織」には執筆スケジュールが書かれている。それによると、1964年7月より分担執筆を初め、1年余りで各担当者が第1回の原稿を完成する。それから、半年あまりで全体の原稿を完了する。さらに、約1年で出版作業を行うように計画されている。そのために毎月定例委員会を開くことになっている。このスケジュールに日程的な無理があり、それが出版できなかつた1つの理由かもしれない。また、学院史の執筆という特殊な作業に対する未経験が関係したかもしれない。編纂作業のために組織を整えることは、必ずしも執筆作業の促進に結びつかない。西南学院史に習熟し、しかも歴史の執筆に対する能力を有した人材が執筆作業には欠かせないからである。

出版はできなかつたが、『西南学院五十年史』編纂作業が残した成果は大きい。西南学院創立五十周年記念行事の一環として、「五十年記念学院資料展」が開かれている。そこで、展示された史料の多くは「五十年史」編纂作業で収集されてのものであろう。それらは35のボックスに現在保存されている西南学院史関連史料のかなりを占めると考えられる。また、「五十年史」が出版できなかつたことは、西南学院にとって貴重な経験となった。西南学院はこの経験を生かして、「西南学院六十年史」に向けた取り組みを準備していった。

3. 第2期「西南学院六十年史」編纂事業をめぐる

(1) 史料について

第2期（1967年～1976年3月）に属する史料を、その内容から分類すると以下の通りとなる。

- ①委員会に関連した史料 12、15、16、19、20、23、32、33、36
- ②学院史編集室に関連した史料 8、10、11、13、17、18、22
- ③編集活動に関連した史料 6、7、14、21、24、25、26、27、30、31、33、34、37、38、75、76、81、82、83
- ④その他の史料 5、9、28、29、35、39

(2) 組織と活動

学院史の編纂作業は1967年以降も着実に続けられた。当初、この作業を担ったのは学院史編纂委員会である⁶。その頃、編纂作業を推進するために重要な組織的変革が実施される。作業の実務を担う学院史編集室の設置である。「史料8 校史編纂をめぐる広報室の改組について」を見ると、1970年10月に広報室を分離して、学院史編纂を主要な業務とする「校史編纂室」の設立が提案されている⁷。「史料18 学院史編集室予算」(1973年4月20日)は、広報室から分離した学院史編集室に関連した予算について記している。室長は田口欽二⁸であった。

学院史編集室の開設が検討される中で、学院史編纂作業も新たな段階を迎えた。執筆者の選定である。「史料12 学院史編纂委員会開催通知」(1971年4月19日)は、議題として「学院史執筆者として三善敏夫先生に委嘱の件」を検討している⁹。執筆者の選定に合わせて、学院は組織の改組を実行している。1971年6月に発信された「史料13 西南学院史編纂組織の改組について」によると、これまで「各部局から選ばれて構成」されていた学院史編纂委員会を解散し、「常任理事会の構成員によって組織された出版委員会」が、「直接編纂企画にあたること」になった。三善敏夫への学院史執筆の委嘱にあわせた改組であろう。さらに、「資料14 学院史の原稿資料執筆に

6 学院史編纂委員会は、第2期の間に、何度か改組され、あるいは新しい組織が作られている。史料が示す変遷は以下の通りである。

1971年6月 「学院史編纂委員会」が「(学院史)出版委員会」に改組される。(史料13)

1972年12月 「西南学院史監修懇談会」が開かれる。(史料15)

1973年2月、4月、11月 学院史編集委員会が開かれる。(史料16、19、20、22)

1974年4月 西南学院史刊行委員会が設置される。(史料27)

1975年9月 西南学院史監修委員会が開かれる。(史料32、33)

1976年2月 西南学院60周年パンフレット委員会が開かれる。(史料36)

7 学院史編集室は1973年4月10日に開設されている。

『西南学院七十年史 下巻』176頁

8 田口欽二は1971年に当時の事務局長中村保三にあてて、2度、校史執筆を断っている。

「史料10 再び校史編纂について」(1971年1月29日)

「史料11 三度校史編纂について」(1971年3月1日)

その後、「草稿原案」の執筆を「条件つきで」引き受けている。

「史料13 四度校史編纂について」(1973年3月26日)

田口の学院史に対する姿勢の転換は、学院史編纂に大きな影響を与えた。

9 三善敏夫への学院史執筆依頼は1971年4月22日の理事会で了承されている。4月19日に開かれた学院史編纂委員会の3日後である。委員会の議決後、直ちに理事会に諮られ、了承されたのであろう。

『西南学院七十年史 下巻』176-177頁。

ついて（お願い）」は7種類の書類をとじこんだものである。それらはいずれも新たに組織された西南学院史出版委員会から関係者各位に対する史料収集の協力や執筆の依頼をしている。

三善敏夫の原稿は1972年12月までに完成した。しかし、「史料15 西南学院史監修者懇談会」（1972年12月14日）は三善原稿に対して慎重な態度をとる¹⁰。設置されていた出版委員会という名称が使用されていない事実が、この時の事情を物語っているように思われる。脱稿された原稿を監修したのは、古賀・中村保三・坂本・村上寅次の4名である。彼らの報告を聞くことから懇談会は始まった。結論として、編集委員会を作り、三善の原稿を根幹として、編集作業を継続することを決めている。編集委員会の構成は次の通りであった。

委員 坂本、中村（保）、村上、中村（俊）、小石原
編集委員長 村上寅次
編集に関する事務 広報室

三善敏夫の原稿は、結局出版に回されなかった。学院史編集委員会は、創立60周年記念の年が迫ってくる中で、1973年4月に新たな動きを見せる。その一つが¹¹1970年から要求の出ていた学院史編集室の開設である。学院史の執筆を重ねて拒絶していた田口欽二が、従来の姿勢を変更したのもこの時である。「史料20 学院史編集委員会」¹¹は学院史編集室の開設に並んで、「学院史関係の組織」を新たにしている。以下の通りである。

10 「史料15」は、「1. 経過説明」の後に、「2. 感想等の主な事項は次の通りである」として、19項目を記している。その中で、三善原稿における問題点が指摘されている。なお、「史料81 学院史（1-7冊）についての意見 坂本」は、「史料15」にある「2. 感想等の主な事項は次のとおりである」に掲載されているいくつかの内容と重なる。したがって、「史料81」は、監修者坂本によって1972年に書かれた原稿であることが特定できる。

11 「史料20」は、「議事1 学院史編集室の開設について」の第3項目で「編集主任は、編集委員会委員長と相談して執筆にあたる」としている。当時の編集主任は田口欽二である。第3項目の規定は田口の学院史執筆に対する柔軟な姿勢への転換と関係しているかもしれない。また、この時の編集委員会委員長は村上寅次である。ところで、「史料82 西南学院史五十五年史目次」には執筆者や執筆年月日が書かれていない。しかし、「史料20」の「Ⅲ これからの活動方針」の(2)には次のようにある。「別紙『西南学院55年史目次』（三善敏夫先生による）を説明。編集委員会で読まれた『西南学院55年史目次』は、「史料82」と見ることができる。

顧問：坂本、ギャロット
監修者：杉本、中村（保）、古賀
編集委員会委員長：村上
編集委員：村上、中村（俊）、小石原、田口
編集主任：田口

学院史編集委員会は、学院史執筆について新たな検討に着手する。「史料22 学院史編集委員会（第4回）のお知らせ」における「議案1」は「学院史の執筆について」である。「史料27 西南学院史編纂関係」（1974年4月26日 常任理事会）は、執筆作業に関する結論を記している。すなわち、第1項で「西南学院史刊行委員会」を立ち上げて、「委員長 W.H.ギャロット（院長） 委員 W.H.ギャロット、坂本重武、杉本勝次、中村保三」としている。第2項では、執筆者として「福本保信、西尾陽太郎、西島幸右」の3名を挙げている。さらに第4項は田口学院史編集室長の役割として、「田口学院史編集室長は執筆者の必要に応じ、編集資料を提供する等の便宜をはかる」としている。福本・西尾・西嶋による執筆作業は迅速に進められ、1975年8月には原稿が完成した。「史料31 西南学院史編集について」（1975年8月11日）は、原稿の完成を前提として書かれている。それによると、原稿は11冊にまとめられ、10冊目まではそれぞれ100枚、11冊目が128枚で、合計128枚であった。福本・西尾・西嶋の原稿も慎重に検討された¹²。「史料32 西南学院史監修（刊行）委員会記録」（1975年9月6日）と「史料33 西南学院史監修委員会記録」（1975年9月13日）は、監修委員による検討の様子を詳細に伝えている。「史料33」は、これまでの監修作業を踏まえて¹³、執筆者との相談、あるいは検討を進めるとしている。ところが、慎重な監修や執筆者と監修者との相談などの結果、11冊の新しい原稿についても出版されないことになった¹⁴。「史料36 西南学院60周年記念パンフレット編集委員会開催について」（1976年2月2日）は、表題にあるとおり、緊急に記念パンフレット編集について協議している。創立六十周年における学院史の編纂に失敗した学院は、急遽「西南

12 三善原稿と福本・西尾・西嶋原稿はどのような関係があったのか。『西南学院七十年史 下巻』（177頁）は、「三善原稿の中、戦前篇の加筆修正を委嘱した」とある。この事実は、三教授の執筆作業に関連する史料からは確認できない。

13 「史料34 監修委員による学院史原稿読後メモ」（1975年12月18日）は、第6冊から11冊までに対す監修委員（三善・中村・坂本）の意見をまとめている。

14 福本・西尾・西嶋による原稿が出版されなかった原因は何か。修正意見が多く出されたことが直ちにその原因となったとは考えにくい。むしろ、「史料32」は複数の委員から執筆者の歴史観に対する違和感が述べられ、他の委員にも賛同者がいたことを記している。これは出版を難しくした理由の一つではなかったか。

学院60周年記念パンフレット」の編纂作業に取り組むことになったのである。

なお、創立60周年を記念して1976年5月10日から20日にかけて、1号館1階の学生ホールにおいて「目に見る西南学院」を開催している。

(3) 成果と課題

西南学院は「西南学院五十年史」編纂作業が残した課題を受け止め、第2期（1967～1976）における学院史編纂と出版の作業に着手した。その一つが学院史編纂委員会から学院史出版委員会への改組に認められる機能の迅速化である。あるいは、編纂作業の実務を担当する学院史編集室の開設も失敗から学んだ結果である。第2期には学院史の出版に向けた環境が一段と整った。

このような状況下で、2度学院史の原稿が仕上げられた。三善原稿（1972年）と福本・西尾・西嶋の原稿（1975年）である。原稿が2度も執筆された、にもかかわらず、「西南学院六十年史」は出版できなかった。

そこに残されていた問題は何なのか。一つには学院史出版スケジュールが考えられている。三善にしても、福本・西尾・西嶋の3名にしても1年余りで大きな原稿を仕上げている。それは出版スケジュールにあわせたためであろう。いずれの原稿に対しても、転記ミスや事実の誤認など多くのミスが指摘されている。それは、短すぎる執筆時間ではやむを得ない事態ではなかったのか。「史料32」は執筆者と監修者の間に歴史観の相違があったことを繰り返し記していた。キリスト教系学校の歴史理解に溝があったとすれば、それは容易に解決できる問題ではない。しかし、史料に見る限り、第2期に執筆者と編集者の間でキリスト教系学校の歴史叙述について十分に協議された形跡はない。そして、監修者による2度に及ぶ不採択である。

第1期に「西南学院五十年史」の刊行はできなかったが、多くの史料を収集した貢献があった。それでは、「西南学院六十年史」の刊行がならなかった第2期についてはどのような貢献を指摘できるのか。

それは2度に及ぶ学院史原稿の執筆に認めるべきであろう。学院史の執筆は決して

西南学院五十五年史目次	
序章 前史	
一、木回バグデスタ叙念と日本伝道	
二、日本はカイヤバグデスタの教育事業	
三、西南学院設立	
第一章 創立前後 大正三(四)十年(五)年(六)年(七)年(八)年(九)年(十)年	
一、誕生まで 三善原稿	
二、戦前編	
三、戦後編	
四、戦後編	
五、戦後編	
六、戦後編	
七、戦後編	
八、戦後編	
九、戦後編	
十、戦後編	
十一、戦後編	
十二、戦後編	
十三、戦後編	
十四、戦後編	
十五、戦後編	
十六、戦後編	
十七、戦後編	
十八、戦後編	
十九、戦後編	
二十、戦後編	
二十一年、戦後編	
二十二年、戦後編	
二十三年、戦後編	
二十四、戦後編	
二十五、戦後編	
二十六、戦後編	
二十七、戦後編	
二十八、戦後編	
二十九、戦後編	
三十、戦後編	
三十一、戦後編	
三十二、戦後編	
三十三、戦後編	
三十四、戦後編	
三十五、戦後編	
三十六、戦後編	
三十七、戦後編	
三十八、戦後編	
三十九、戦後編	
四十、戦後編	
四十一、戦後編	
四十二、戦後編	
四十三、戦後編	
四十四、戦後編	
四十五、戦後編	
四十六、戦後編	
四十七、戦後編	
四十八、戦後編	
四十九、戦後編	
五十、戦後編	
五十一、戦後編	
五十二、戦後編	
五十三、戦後編	
五十四、戦後編	
五十五、戦後編	
五十六、戦後編	
五十七、戦後編	
五十八、戦後編	
五十九、戦後編	
六十、戦後編	
六十一、戦後編	
六十二、戦後編	
六十三、戦後編	
六十四、戦後編	
六十五、戦後編	
六十六、戦後編	
六十七、戦後編	
六十八、戦後編	
六十九、戦後編	
七十、戦後編	
七十一、戦後編	
七十二、戦後編	
七十三、戦後編	
七十四、戦後編	
七十五、戦後編	
七十六、戦後編	
七十七、戦後編	
七十八、戦後編	
七十九、戦後編	
八十、戦後編	
八十一、戦後編	
八十二、戦後編	
八十三、戦後編	
八十四、戦後編	
八十五、戦後編	
八十六、戦後編	
八十七、戦後編	
八十八、戦後編	
八十九、戦後編	
九十、戦後編	
九十一、戦後編	
九十二、戦後編	
九十三、戦後編	
九十四、戦後編	
九十五、戦後編	
九十六、戦後編	
九十七、戦後編	
九十八、戦後編	
九十九、戦後編	
百、戦後編	

「史料82 西南学院五十五年史目次」

執筆者だけでできるものではない。多くの史料が収集され、それらが学院史執筆のために整理され、分析され、執筆者に提供される。このような環境が整えられて初めて、学院史は執筆が可能となる。西南学院は学院史の執筆が可能な環境を整えるために学院を挙げて取り組んだとって過言ではない。

三善原稿も福本・西尾・西嶋原稿も現在、残念ながら、手にすることができない。しかし、三善が残した「西南学院五十五年史目次」がある。これを見ると、学院史の概要が把握されている。いくつかのミスや歴史理解に相違があったかもしれない。しかし、二度の学院史執筆を通して、西南学院は、自らの歴史概要の把握に到達していたのである。

4. 第3期 『西南学院七十年史』の出版時期をめぐって

はじめに

「学院史編集室史」のファイルに取められている史料は、多大な努力にもかかわらず第1期（1957年～1966年）には「西南学院五十年史」を刊行できず、第2期（1967年～1976年）には「西南学院六十年史」を刊行できなかったいきさつを語っていた。第3期（1977年～1986年）は、それまでの20年間に対して、『西南学院七十年史 上巻・下巻』を含む出版物を始め、学院史資料室の開設など、これまでの成果が次々と達成された時期であった。史料を中心にして、この時期について検討する。

(1) 史料について

第3期（1977年～1986年）の史料は、その内容から次の通り分類できる。

- ①学院史企画委員会の関連史料 60、74
- ②学院史編集室の関連史料 50、51、52、55、59、64
- ③編集活動の関連史料 40、41、47、49、61、62、72
- ④出版に関連した史料（『勝山餘籟』関連）42、45
（『C. K. ドージャーの生涯』関連）48
（『西南学院七十年史』関連）63、65
- ⑤学院史料展示室の関連史料 43、44、54、56、57、71、73
- ⑥その他の史料 46、53、58

学院史企画委員会(全体)

No. /

委員会回次 年月日時	第1回 1980年 11月8日(土) 12.20~18.30	第2回 1980年 12月8日(土) 12.30~18.30	第3回 1981年 5月11日(月) 2.30~3.20	第4回 1981年 6月25日(水) 8.11~8.20	第5回 1981年 10月12日(月) 7.20~7.30	第6回 1981年 12月11日(金) 11.18~18.20	第7回 1982年 6月25日(水) 16.00~18.30	第8回 1982年 3月17日(土) 9.00~12.30	第9回 1982年 2月9日(水) 16.00~18.00	第10回 1982年 10月31日(水) 16.00~18.00	第11回 1982年 2月8日(金) 16.30~18.00	第12回 1982年 7月29日(月) 16.30~18.00	第13回 1982年 11月15日(金) 12.00~13.00
村上寛次	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
岡谷定夫	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
田中輝雄	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
唐木芳文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
後藤泰二	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
木村良照	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
清水実	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
大森衛	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
志波渥宇	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
小石原勝	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
渡辺孝輔門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
田口欽二	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
C.L.ホエー									○	○	○	○	○

コナ 3-9-115 2004-1

3-9-115 2004-1

「史料74 学院史企画委員会」

(1) 学院史企画委員会と学院史編集室

「西南学院七十年史」の編纂作業は、2つの組織を中心に進められた。学院史企画委員会と学院史編集室である。まず、学院史企画委員会について見ておこう。

「史料74 学院史企画委員会」は、この委員会には全体会と9つの部会があったこと、それぞれの委員会の出席者氏名と開催数それと開催日時を、下記の通り記載している¹⁵。

15 学院史企画委員会の開催日時は、量的な問題もあって、(注)に記す。

1. 学院史企画委員会(全体)

開催日時 1980年 11月8日(土)、12月8日(土)
 1981年 5月11日(月)、6月25日(水)、10月12日(月)、
 12月11日(金)
 1982年 6月25日(金)
 1984年 3月17日(土)、4月19日(木)、10月31日(水)
 1985年 2月8日(金)、7月29日(月)、11月15日(金)

2. 学院史企画委員会(中学校部会)

開催日時 1981年 1月9日、7月30日~31日(金) 合宿
 1982年 2月4日(木)、6月28日(月)、8月7日(土)

3. 学院史企画委員会(高等学校部会)

開催日時 1981年 2月16日、4月28日(火)、8月3日~4日(火) 合宿、

1. 学院史企画委員会（全体）

出席者 村上寅次、関谷定夫、田中輝雄、唐木田芳文、後藤泰二、木村良熙、
清水実、大森衛、志渡澤亨、小石原勝、渡辺常右衛門、田口欽二、
C.L. ホエリー

委員会回数 13回

2. 学院史企画委員会（中学校部会）

出席者 大森衛、小石原勝、田口欽二、志渡澤亨

委員会回数 5回

-
- 8月28日（金）歴代教頭座談会
- 1982年 4月3日（土）、5月17日（月）、6月19日（土）、
8月9日（月）、9月11日（土）、9月17日（金）、
9月22日（水）、9月29日（水）、10月12日（火）、
11月27日（月）
- 1983年 1月8日（土）、1月29日（土）、3月17日（木）、
4月9日（土）、5月30日（月）
- 1984年 4月21日（土）
- ### 4. 学院史企画委員会（大学部会）
- 開催日時 1981年 2月19日（木）、3月18日、4月10日（金）、4月24日（金）、
7月23日～25日（土）合宿
- 1982年 1月27日（水）、8月28日～29日（日）合宿、
10月16日（土）理事会開催のため中止、10月23日（土）、
10月30日～31日（日）合宿、11月9日（火）、11月29日（月）、
12月23日（金）
- 1983年 1月27日（金）、2月28日（月）、3月18日（金）、
4月22日（金）、5月17日（火）、6月20日（月）、
7月14日～15日（金）合宿
- 1984年 2月27日（月）
- ### 5. 学院史企画委員会（戦前篇総論部会）
- 開催日時 1985年 3月20日（水）、4月10日～11日（水）合宿、
4月26日～27日（土）合宿
- ### 6. 学院史企画委員会（戦後篇総論部会）
- 開催日時 1985年 4月1日（月）、4月12日（金）
- ### 7. 学院史企画委員会（前史部会）
- 開催日時 1982年 9月8日（水）、9月10日（金）
- ### 8. 学院史企画委員会（前史篇部会）
- 開催日時 1985年 4月17日（水）、5月1日（水）、5月15日（水）、
5月21日（火）、7月17日（水）
- ### 9. 学院史企画委員会戦前篇各論（中学部）部会
- 開催日時 1985年 4月30日（火）、5月14日（火）
- ### 10. 学院史企画委員会戦前篇各論（高等学部）部会
- 開催日時 1985年 5月30日（木）、5月31日（金）、7月16日（火）

3. 学院史企画委員会（高等学校部会）

出席者 木村良熙、清水実、田口欽二、（歴代教頭）坪井正之・宮本良樹・
吉原勝・中村俊夫・川内芳夫、安部健一、池邊敬光、内海敬三、
中村文昭、柴田道明

委員会回数 20回

4. 学院史企画委員会（大学部会）

出席者 村上寅次、関谷定夫、田中輝雄、唐木田芳文、後藤泰二、田口欽二、
木村良熙、大森衛

委員会回数 21回（実質20回）

5. 学院史企画委員会（戦前篇総論部会）

出席者 村上寅次、田中輝雄、唐木田芳文、後藤泰二、田口欽二

委員会回数 3回

6. 学院史企画委員会（戦後篇総論部会）

出席者 村上寅次、志渡澤亮、渡邊常右衛門、田口欽二

委員会回数 2回

7. 学院史企画委員会（前史部会）

出席者 清水実、田口欽二、斉藤剛毅

委員会回数 2回

8. 学院史企画委員会（前史篇部会）

出席者 村上寅次、C.K.ホエリー、関谷定夫、F.C.パーカー、清水実、
田口欽二

委員会回数 5回

9. 学院史企画委員会戦前篇各論（中学部）部会

出席者 村上寅次、木村良熙、小石原勝、田口欽二

委員会回数 2回

10. 学院史企画委員会戦前篇各論（高等学部）部会

出席者 村上寅次、田中輝雄、唐木田芳文、後藤泰二、田口欽二

委員会回数 3回

「史料74」で見ると、「学院史企画委員会（全体）」の性格は、かなり明快だと思われる。この委員会には西南学院のすべての学校から、舞鶴幼稚園と早緑子供の園を除いて、関係者が出席している。開催日時でも『西南学院七十年史 上巻・下巻』を編纂した1980年から1985年まで、6年間にわたって継続的に委員会を開いている。学院

史刊行に向けて責任を負い、監修などの実務的な作業もこの委員会で行われていたと見られる¹⁶。

「全体」会の安定した継続的な活動に対して、9つの部会では開催年次と委員会の開催数にかなりの違いがある。また、部会の性格が他の部会との関係であいまいなものもある。1981年から開かれていたのは、「2 中学校部会」「3 高等学校部会」、そして「4 大学部会」である。これらは、「2」を除くと多くの委員会を開いている。全体会と共に、当初からこれらの部会は設置され、開かれていたと見られる。他方、「5 戦前篇 総論部会」「6 戦後篇 総論部会」「8 前史部会」「9 戦前篇各論 中学部部会」「10 戦前篇各論 高等学校部会」は、いずれも1985年になって開かれている。出版の前年になって突然開かれたのは、最終局面でこれらの部会の必要が生じたからだと考えられる。これらは委員会の回数も少ない¹⁷。「7 前史部会」は性格があいまいである。出席者の性格が他の部会とは違ううえに、「8 前史篇部会」との関係も不明である。

「史料74」に認められた年代上のばらつき的一端が、「史料60 学院史企画委員会経過報告」（1981年10月13日）から理解できる。「史料60」は学院史企画委員会（全体）が発足してほぼ一年後にまとめた経過報告という体裁をとっているが、その内容は決して経過の報告ではない。それによると、原稿はすべて1982年3月までに書き上げ、出版予定を1982年12月末としている。さらに「体裁及び部数、単価、出版量」まで、その見込みを記している。要するに、「史料60」は出版に向けた具体案を記している。

「史料60」は「史料74」にあった1981年に発足した部会と1985年に発足した部会の違いの一面を示している。1981年に設置された部会は、「史料60」の出版計画にすでに組み込まれており、1982年末の出版を目指して作業に取り組んでいた¹⁸。この計画は、しかし、1986年まで延期される。延期された課題を調整し、克服するために必要

16 「学院史企画委員会（全体）」は、1980年11月に常任理事会が学院史刊行を推進するために設置した。

「学院史企画委員会による学院史の完成」（『西南学院七十年史 下巻』184～186頁）
村上寅次「あとがき」（『西南学院七十年史 下巻』）

17 村上寅次「あとがき」と『西南学院七十年史 下巻』（186頁）によると、原稿は1984年4月に完成した。しかし、この段階で「協議する機関がなかった」原稿が残っていた。それは、現在の『西南学院七十年史』では、『上巻』の「第1部 前史篇」「第2部 戦前篇 総論」、『下巻』の「第3部 戦前篇 総論」にあたりと見られる。そこで、これらを検討するための部会が急遽設けられた。それが、「4」「5」「6」「8」「9」「10」である。

18 『西南学院七十年史 下巻』によると、当初の計画では1983年末までに完成させる予定であった。

『西南学院七十年史 下巻』185頁

とされた部会が、「5」「6」「8」「9」「10」である。

次いで、「学院史編集室」関連の史料を見ておこう。これに属する史料として分類したものは6点ある。これらはさらに4種類に細分されるが、この区別は学院史編集室の活動内容に対応している。第1は学院史編集作業に関するものであり、「史料51」「史料52」「史料59」がそれである。第2に学院史資料室に関するものがあり、「史料50」がそれである。第3に学院史資料室規程に関するものがあり、「史料55」と「史料64」がそれである。

「史料59 学院史の出版とその意義」は、1967年の広報室開設以降の学院史編集作業を概観する。その上で、学院史企画委員会（1980年11月発足）による約1年間の活動内容を記載する。それによると、委員会の当初の目標は「西南学院六十五年史」の完成であり、それは「史料60」と対応する。

「史料50 学院史資料室の現状」は、まず1978年5月に開設された「学院史資料室の現状」を述べる。その上で、今後の希望として、「資料室についての希望」「資料収集の範囲」「資料収集の方法」、さらに「長期的計画について」説明している。「史料50」の内容は「学院資料展示室」関連の史料とその内容において対応している。

「史料53 学院史資料室規程（関西学院）」は関西学院の学院史資料室の規程であり、「史料62 西南学院 学院史資料室規程（案）」（1987年9月4日付、1987年制定予定）は、西南学院の規程案である。「史料62」が検討された時期は、『西南学院七十年史 上巻・下巻』刊行を初め、学院創立70周年記念事業が一段落した時期である。この時に当たって、関西学院の規程を参考にし、これまでの経験も生かして、学院史資料整理に関する規程を整え、その活動を充実し、明確にしようとしている。

(2) 学院史編纂作業と出版

第3期で「編集活動の関連史料」として分類したものは7点ある。それらはさらに学院史の内容に関するもの3点、保存資料に関するもの1点、学院史編纂の経緯に関するもの3点に区分できる。

学院史の内容に関するものとして、まず「史料40 学院史の事実確認についてのお願い」がある。これは「西南学院が北部バプテスト宣教師アドナイルム・ジャドソンによる外国伝道100年記念事業として開設されたこと」及び「西南学院創立時の理事長はJ.H. ローウであること」の事実確認を理事会に求めている。「史料41 アドナイルム・ジャドソン」は、アドナイルム・ジャドソンの所属に関する調査報告である。これらは西南学院創立に関する調査報告書として保存されたのであろう。「史料47 『学院史』現状報告」は、学院史編集室長 田口欽二が1978年8月の時点で書い

ていた原稿に関する報告である。この時期に学院史は3部構成で検討されていた。田口原稿はその中の第2部に置かれる予定の3章分である。なお、1978年における田口の執筆に関しては、「史料72」が関係している。

保存資料に関するものは、「史料49 学院史保存資料」だけである。これは1978年時点で収集されていた史料の概要である¹⁹。学院史編纂作業は、史料の収集が並行して行われる。現在保存されている資料の多くもこの時点までに集められたと見られる。

学院史編纂に関する史料は3点ある。その中で一番古いものは「史料72 学院史編纂に関する文書」である。これは田口欽二の私的メモと見られる。年表は1951年の「Seinan Gakuin-Today and Yesterday」の発行に始まり、年代順に学院史関連事項を並べている。事項として最後に記されているのは、「1978年5月 田口欽二 学院史執筆はじむ」である²⁰。記載年月日は1979年6月が最後なので、この時点で書かれたメモであろう。それに対し、「史料61 編集後記 (村上寅次)」と「史料62 学院史の完成」はいずれも『西南学院七十年史 下巻』に収められている公的な文章である。両者は長年にわたる学院史編纂作業の経過に触れているので、これらによって判明する事実があるだけでなく、両者の強調点の違いから明らかになる事実もある。年代順に見ると、次のような事実がある。

- ① 創立20周年である1936年には、学院20周年史の出版が課題となっていた。
- ② 30周年 (1946年)、40周年 (1956年) にも、学院史出版が課題として自覚されている。
- ③ 50周年 (1966年) の取り組みは1962年9月27日にも開かれていた。計画では1963年から分担執筆を始め、1966年9月の刊行を予定していた。しかし、写真集「西南学院—その50年の歩み」発行と創立50周年記念学院資料展の開催に終わった。
- ④ 『舞鶴幼稚園六〇年の歩み』(1973年)、『児童教育科三五年の歩み』(1974年)、『新学制 西南学院中学校三十年の歩み』(1977年) は、西南学院史編集室が担当して、次々と出版された。
- ⑤ 『西南学院資料 第1集』(1980年3月)、『西南学院史年表 (一)』(1980年3月)、

19 「史料49」は、保存史料を4種類に大別している。

- (1) 西南学院に関するもの
- (2) 他の学校に関するもの
- (3) キリスト教に関係するもの
- (4) 郷土に関するもの

20 先に見たとおり、田口は「史料13」(1978年)ですでに学院史執筆に前向きな態度を示していた。

『西南学院資料 第2集』（1980年7月）、『西南学院史年表(二)』（1980年7月）は西南学院史編集室が担当して出版した。

- ⑥『勝山餘籟』（1977年）は学院史編集室が編集出版の事務を担当した。
- ⑦1976年の創立60周年にあたり、5月10日から20日にかけて、1号館1階学生ホールで「眼に見る西南学院」を開催した。その後、1977年から1979年にかけて、学院史編集室は自然科学館5号館1階に置かれた。
- ⑧『西南学院七十年史』の「序論」と「前史篇」をめぐって、最後まできびしい議論が続いた。

「出版に関する史料」は4点あるが、そのうちの3点は複数史料をホッチキスで閉じている。

「史料42 見積書（波多野先生遺稿集）」は7枚が閉じられている。これらの史料から『勝山餘籟』出版に関わるいくつかの事実が分かる。「見積書（福岡印刷）」によると、出版予定部数は1,000冊で、金額は225万円であった。「波多野遺文集の配布先等について」は、「1. 贈呈」先と「2. 有料配布」先に関する常任理事会の決定事項を記している。常任理事会の決定にしたがって計画されたと見られる「遺文集配布先計画表（案）」によると、西南学院関係者に458冊の配布を計画している。他の4枚はいずれも出版記念会に関係している。「史料45 勝山餘籟出版される」は、波多野を「明治・大正・昭和三代にわたる優れたキリスト教教育者」として紹介し、推薦している。「史料48 見積書（C.K.ドージャー生誕百年記念誌）」は、7枚の史料を閉じている。内訳は「C.K.ドージャー生誕百年記念誌」関連が2枚、「学院史資料」の関連が1枚、『勝山餘籟』関連が2枚、「保育園の30年史」が2枚である。ドージャー関連の2枚は、いずれも見積書（1978年10月16日付、1979年4月13日付）である。後者によると、部数は1万部、見積り金額は90万円である。「学院史資料」の見積書（1978年10月16日付）は、300冊で18万円である。これは、『西南学院資料 第1集』の見積りだと見られる。「早緑子供園の30年史」に関する2枚の史料は、見積書と本の概要メモである。それによると、500冊で50万円が予定されている。「史料61 納品書（西南学院七十年史）」は、6枚が閉じられている。「見積書」「請求書」「納品書」の内容は一致している。したがって、6,000部印刷され、26,400,000円であったことが分かる。「史料63 『学院史』の委託頒布について」は2枚閉じられている。西南学院消費生活協同組合とヨルダン社に当て委託販売を依頼した文書のコピーで、内容は同じである。

これら出版に関する多くの史料は一つの事実を示している。西南学院に関係する多

くの出版物の刊行に当たり、出版社との交渉などを担当したのが学院史編集室であった事実である。

(2) 資料展示室の開設

学院史編纂及び出版作業と並ぶ学院史編纂室の主要な業務に、学院史資料室の開設と展示があった。ここでは、学院史資料室の開設に関連した史料を中心に考察する。

「史料展示室に関連した史料」は、その内容から以下の通り区分できる。

史料展示室開設に関連した史料 43、44、53、73

展示ケースに関連した史料 54、56、57、71

その他の史料 46、58

「史料53 西南学院の歴史を知ろう」は、1977年に自然科学館（5号館）1階に移転した学院史編集室と資料展示室を紹介している。それに対して、「史料43 資料室開設にあたってのお願い」は、資料展示に関わる個々の項目について計画を記している。「史料44 御見積書」もガラス付陳列ケースなど、個々の品目に関する見積りである。他方、展示室全体の様子を知ることができる「史料73 パネル展示室他」は、史料展示室の全体図と「ガラス付陳列ケース」及び「パネル展示衝立」の図面である。展示ケースについては2種類の展示物に関連している。「グーテンベルク聖書の復刻本」展示（史料57）と「トーラーとシナイ本 死者の書」の展示ケース（史料56）である。学院史の編纂はいつも史料の収集と整理という作業が伴う。学院史編集室はそれらを展示し、公開するという仕事も担った。その成果によって、史料展示室は学生と教職員が直接西南学院史に関する史料を目にすることができた。

その他の史料が2点ある。「史料46 歴代院長の慰霊祭について」は、学院史編集室長 田欽二による創立記念日に歴代院長の慰霊祭を行うようにとの要望書である。これは実施されなかった。「史料58 西南学院創立64周年記念式典について」は、記念式典への案内である。

終わりに

『学院編集室史』は、さらに5点の史料を含んでいる。創立七十周年記念事業を終えて間もない時期の「史料66 学園の生き字引退職」と1995年の「史料67 当面の学院史業務について」「史料68 学院史業務に関する話し合いについて」「史料69 『C.

K. ドージャー小伝』(仮称)の刊行について「史料70 『C. K. ドージャー小伝』(仮称)の刊行及び配布について」である。1995年にかかれた4点は学院創立80周年を迎えるにあたって取り組まれた事業内容を反映している。学院史編纂作業は「七十年史」で終わったのではなく、その後も続いているし、その取り組みがあることをこれらの史料は示している。

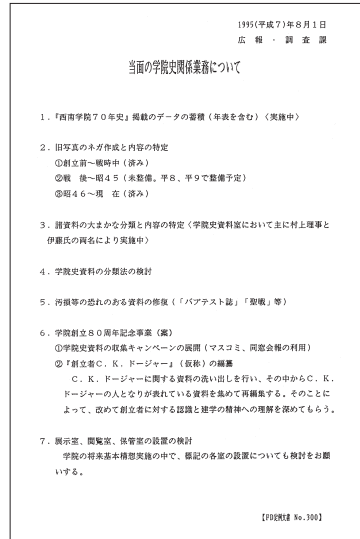
『学院史編集室史』に収められた83点の史料は、「西南学院五〇年史」の編纂作業と「西南学院六〇年史」の編纂作業を記し、さらに『西南学院七十年史 上巻・下巻』の編纂作業と出版について、さらにその後の取り組みをさまざまな角度から語っていた。概観すると、「西南学院五〇年史」と「西南学院六〇年史」は刊行そのものにつ

いては失敗した。しかし、二度の試みによって多くの史料が集められ、編纂作業について多くを学び、学院史の概観を叙述した。それだけでも二十年にわたる歴史がある。失敗を重ねた年月に、しかし、西南学院史出版に向けた情熱が衰えたことはなく、強い意志が失われることもなかった。

組織に関してみると、学院史編纂作業に学院が加わることと執筆者との関わりが課題であった。参加者すべてが執筆できるわけではなかったし、執筆者が学院関係者の期待に直ちにこたえたわけでもなかった。村上寅次「編集後記」(『西南学院七十年史

下巻』)は「七十年史」においてもなお、執筆者と学院関係者との困難な課題が残っていたことを率直に書いている。問題の根本にあるものは、西南学院史に対する基本的な理解であると思われる。そもそもキリスト教系学校とは何なのか。キリスト教系学校の歴史を、それにふさわしく表現するために何が必要なのか。このような西南学院史に関する基本的な共通理解がまず必要であったと考えられる。

学院史編集室の中心的な仕事は学院史の編纂と並んで、史料展示室の準備と開設であった。これも興味深い事実である。学院史編纂作業はたゆまざる史料の収集と整理、そして史料の分析を基本的な課題とする。地道で膨大な基本作業を土台として、学院史の執筆はなる。同様に、学院史編纂の基本作業は、学院史資料展示室の開設と充実



「史料67 当面の学院史関係業務について」
(1995年8月1日)

を備えた。

西南学院が学院百年史の編纂作業を開始するのであれば、それは新たな史料収集作業を伴うものでなければならない。この史料収集と整理、分析の作業は西南学院百年史編纂作業に対する基本作業であるばかりでなく、2006年5月に開館される西南学院大学博物館の展示計画に対しても多大な貢献が期待される。

『学院史編集室史』ファイルに保管された史料から今日においてもなお、多くを学ぶことができる。